

日田市

おお ひ よし たけ
大肥吉竹遺跡

－大肥川河川災害復旧等関連緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2022

大分県立埋蔵文化財センター

おお ひ よし たけ
大肥吉竹遺跡

－大肥川河川災害復旧等関連緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

序 文

本書は、大肥川河川災害復旧等関連緊急事業に伴い、大分県土木建築部日田土木事務所の依頼を受けて大分県教育委員会が実施した、大肥吉竹遺跡の発掘調査報告書です。

発掘調査の起因となった、平成29年7月九州北部豪雨では、日田市をはじめ福岡県朝倉市・添田町・東峰村を中心に各所で河川の氾濫や土砂崩れが発生し、甚大な被害をもたらされました。こうした災害を受け、大肥川の捷水路工事が計画され、それに先立つ大肥吉竹遺跡発掘調査が行われました。

大肥吉竹遺跡の発掘調査では、古墳時代から古代の水路跡や、中世から近世の溜井戸跡等、水田農耕に関わる遺構が確認されました。周辺における日田市教育委員会の発掘調査では古墳時代から古代の大規模な集落跡が確認されており、今回発見された遺構はこの集落に伴う水田跡であるとみられます。また、水田とともに過去の洪水層も複数見つかっており、この地域が何度も洪水に見舞われながら、そのたびに災害から立ち直って生活が営まれてきた様子が窺えました。平成29年7月九州北部豪雨の被災地では、現在も復旧事業が行われています。本発掘調査も災害復旧事業の一環として行われたものであり、被災地の一日も早い復旧を願ってやみません。

本書が埋蔵文化財の保護・啓発とともに、学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施にあたり多大な御支援・御協力をいただいた関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

令和4年3月31日

大分県立埋蔵文化財センター

所長 松 本 昌 浩

例 言

1. 本書は令和2年度に実施した、大分県日田市大字大肥字吉竹に所在する大肥吉竹遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大肥川河川災害復旧等関連緊急事業に伴い、大分県土木建築部日田土木事務所の依頼を受けて大分県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 大肥吉竹遺跡の発掘調査は令和2年4月14日～7月2日にかけて実施し、大分県立埋蔵文化財センター調査第一課 主事 植田紘正、企画普及課 非常勤職員 後藤一重が担当した。
4. 発掘調査の実施にあたり、発掘調査及び記録作成、現場管理等を支援業務として民間調査組織に委託した。発掘調査における実測図の作成及び写真撮影は上記調査員の指示のもと下記の支援業務受託者が行った。
・株式会社九州文化財総合研究所（調査技師 畔津宏幸、権藤奈緒美・調査助手 井上索裕、平野和行）
5. 出土品の洗浄、注記、接合、実測、写真撮影、トレース等の整理作業は令和3年度に株式会社九州文化財総合研究所に委託した。遺構・遺物図版の作成は植田が行った。
6. 出土遺物及び調査記録は大分県立埋蔵文化財センター（大分市牧緑町1番61号）で保管している。
7. 本書で使用する方位は座標北で、座標値は世界測地系の数値である。
8. 本書で使用する遺構略号は下記のとおりである。
SK（土坑）、SD（溝）、SP（柱穴）
9. 本書の執筆・編集は植田が行った。

目 次

序 文 例 言

第1章 調査に至る経緯と発掘調査の経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	1
第3節 整理作業・報告書作成の経過	2
第4節 調査組織の構成	2

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 大肥川流域の歴史的環境	3

第3章 発掘調査の成果

第1節 確認調査の概要	5
第2節 本調査の概要	5
第3節 調査区の土層	5
第4節 遺構と遺物	10

遺構一覧表	20
遺物観察表	21

第4章 総括

1. 本調査地の年代と位置づけ	22
2. 大肥吉竹遺跡周辺の土地利用について	22
写真図版	25

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 大肥吉竹遺跡と周辺の遺跡 (1/20,000)	4	第14図 その他出土遺物 (1/3)	13
第2図 試掘調査地点	5	第15図 区域2 遺構配置図 (1/600)	14
第3図 大肥吉竹遺跡遺構配置図 (1/800)	6	第16図 SD-6 実測図 (1/100)	15
第4図 区域1 トレンチ西側土層断面図 (1/60)	7	第17図 SD-6 出土遺物 (1/3)	15
第5図 区域1 トレンチ南壁土層断面図 (1/60)	8	第18図 SD-7 実測図 (1/40)	16
第6図 区域2 トレンチ西壁土層断面図 (1/60)	9	第19図 SD-7 出土遺物 (1/3)	16
第7図 区域1 遺構配置図 (1/600)	10	第21図 SD-11 出土遺物 (1/3)	16
第8図 SD-1 実測図、土層断面図 (1/40)	11	第20図 SD-11 SD-12 SD-17 実測図 (1/120)	17
第9図 SD-3 実測図、土層断面図 (1/300、1/40)	11	第22図 検出時に出土した遺物 (14～27は1/3、28は1/2)	18
第10図 SD-3 出土遺物 (1/3)	12	第23図 その他遺物 (1/3)	19
第11図 SK-1 実測図 (1/30)	12	第24図 大肥吉竹遺跡 遺構配置図 (S=1/900)	23
第12図 SD-4 実測図 (1/60)	12	第25図 大肥吉竹遺跡周辺の土地利用図	24
第13図 SE-1 実測図 (1/30)	13		

第1章 調査に至る経緯と発掘調査の経過

第1節 調査に至る経緯

大肥吉竹遺跡の所在する日田市は大分県の西部に位置する。日田市は筑後川上流域にあたり、阿蘇外輪山北麓に源を発する筑後川本流の大山川に、玖珠川・花月川・大肥川等の河川を集めて日田盆地を貫流し、有明海に注ぎ込む。この大小さまざまな河川を有することから「水郷日田」として知られている。この豊富な水資源は多くの恵みをもたらす一方で、たびたび水害に見舞われてきた地域でもある。

平成29年7月5日から6日にかけて、福岡県筑後地方から大分県西部にかけて線状降水帯が形成され、長時間にわたって猛烈な雨が観測された（平成29年7月九州北部豪雨）。この豪雨によって、福岡県朝倉市や東峰村、大分県日田市を中心に河川の氾濫や土砂崩れ等が発生するなど、甚大な被害をもたらされた。日田市でも被害の大きかった地域のひとつが大肥川流域で、床上浸水80戸、床下浸水26戸、JR日田彦山線は鉄橋の流出や大行司駅（福岡県東峰村）の駅舎倒壊等により夜明駅～添田駅間が不通となるなどの被害が発生した。平成29年8月8日に日本国政府はこの豪雨を「激甚災害に対処するための特別の財政援助等に関する法律」に基づく激甚災害に指定するとともに、福岡県朝倉市・東峰村・添田町、大分県日田市の4地域が局地激甚災害に指定された。

この豪雨災害をうけ、大分県では早期の災害復旧とともに河道掘削や築堤・護岸工、橋梁改築を行う河川災害復旧等関連緊急事業を行うこととなり、大分県土木建築部日田土木事務所が事業者となって令和3年度の完成を目指して工事が進められている。大肥川ではこうした復旧工事に加え、大肥川の増水時に水を逃がす捷水路工事が計画された。しかし、この捷水路自体が大肥吉竹遺跡として周知されている中で行われるものであり、JR日田彦山線を挟んだ大肥川蛇行部では圃場整備に伴う日田市教育委員会の発掘調査により、古墳時代から古代を中心とした大規模な集落が確認されていることから、この計画区域にも遺跡が展開する可能性が十分に予想され、事前の確認調査を行うこととなった。

確認調査は日田土木事務所の依頼を受け、令和元年11月13日～11月14日にかけて実施した。調査は重機1台を使用してトレンチを掘り下げ、各層位面で人力により遺構を確認するとともに出土遺物の回収を行った。その結果、一部のトレンチで溝状遺構や土坑、流路等の遺構を検出したが、全体として遺構は希薄であった。こうした状況は、日田市教育委員会が確認した集落の縁辺部であることが想定されたが、面的に調査することが必要と判断し、約5,000㎡について記録作成を目的とした本調査が必要との結論に至った。この結果を受け、関係機関（土木建築部建設政策課、河川課、日田土木事務所、教育庁文化課、県立埋蔵文化財センター）で、発掘調査の実施時期や所要経費、工事工程との調整等について協議し、令和2年4～7月に発掘調査、令和3年度に出土品の整理作業及び報告書作成を行うこととなった。

第2節 発掘調査の経過

令和元年度に1月31日付で日田土木事務所長から大分県立埋蔵文化財センター所長あて埋蔵文化財発掘調査（本調査）の依頼が提出された。これを受け事業者と発掘調査の実施時期や期間・経費等について調整を重ね、同年1月31日付で発掘調査の実施計画及び所要経費見積について回答した。令和2年4月10日には大分県教育庁文化課へ文化財保護法第99条第1項に基づく発掘調査の施行を通知するとともに、日田市教育委員会及び日田警察署へ発掘調査の協力を依頼した。

本調査の実施にあたっては、重機での表土除去、人力掘削（遺構検出・遺構掘削）、記録写真撮影、遺構実測、空中写真撮影、実測原図のデジタルトレース図作成、現場管理及び労務管理等を埋蔵文化財発掘調査支援業務として一括して民間調査組織に委託した。その一方で調査区の設定や層序の確認、遺構の認定、遺構埋土や調査区土層の分層等は埋蔵文化財センター調査員が行い、遺構の性格や遺跡全体の関係を把握しながら受託業者に作業指示を与え、調査員が常駐して全体を指揮監督する体制をとった。支援業務委託における作業班は1班につき調査技師・調査助手各1名、作業員20名を基本とした。

本調査は令和2年4月20日に1区の表土除去に着手し、人力による遺構検出作業、遺構発掘作業、写真及び実測図による記録作成作業、空中写真撮影を経て、5月22日に1区の埋め戻しを完了した。引き

続き2区の調査に着手し、7月2日の埋め戻し・調査機材等の撤収をもって現地作業を終了した。7月3日には大分県教育委員会、日田市教育委員会及び大分土木建築部日田土木事務所へ発掘調査の終了を報告・通知するとともに、日田警察署へ文化財保護法第100条第2項に基づく埋蔵文化財の発見を通知した。出土遺物は土師器、須恵器等、コンテナボックスにして6箱であった。

第3節 整理作業・報告書作成の経過

発掘調査出土品の整理作業は、令和3年度に実施した。整理作業は大肥吉竹遺跡を含む当該年度整理実施事業を一括して「埋蔵文化財センターが実施する埋蔵文化財発掘調査に係る整理作業委託」として発注した。業務は基本作業と資料作成業務からなり、埋蔵文化財センター整理作業棟を作業場所として実施した。委託内容は出土遺物の水洗、出土地点の注記、遺物接合・復元、遺物実測・拓本採取、遺物観察基礎データ作成、遺物実測原図のトレース、遺物写真撮影、及び遺物の分けや収納等諸作業である。委託業務では作業工程ごとに調査担当者が完了確認を行い、作業精度の確保に努めた。整理作業は令和3年4月20日～7月2日にかけて実施し、8月28日に委託成果物の提出を受け、同日の完了検査を経て終了した。

報告書作成にかかる遺構・遺物実測図版作成作業や原稿執筆、編集作業は調査担当者が整理作業と並行して行い、令和3年1月に原稿を入稿し、3度の校正を経て本書を刊行した。令和3年3月末には本書を刊行し、これを以て本事業を完了した。

第4節 調査組織の構成

大肥吉竹遺跡の発掘調査に係る調査組織は以下のとおりである。

調査主体 大分県教育委員会

調査機関 大分県立埋蔵文化財センター

令和2年度 本発掘調査

調査責任者 松本 昌浩（大分県立埋蔵文化財センター所長）

調査総括 後藤晃一（大分県立埋蔵文化財センター調査第二課長兼調査第一課長）

調査事務 稗田 淳（同 総務課長）

西森公誠（同 総務課副主幹）

池見佳輔（同 総務課主事）

調査担当 植田紘正（同 調査第一課主事、本調査担当）

後藤一重（同 企画普及課非常勤職員、本調査担当）

発掘調査支援業務委託受託者 株式会社九州文化財総合研究所

（調査技師 畔津宏幸、権藤奈緒美 ・調査助手 井上索裕、平野和行）

令和3年度	整理作業、報告書作成	
調査責任者	松本昌浩（大分県立埋蔵文化財センター所長）	
調査総括	後藤晃一（大分県立埋蔵文化財センター副所長兼調査第一課長）	
調査事務	藤原邦夫（	同 総務課長）
	西森公誠（	同 総務課副主幹）
	池見佳輔（	同 総務課主事）
調査担当	植田紘正（	同 調査第一課主事、整理作業及び報告書作成担当）
	吉田 寛（	同 調査第二課長、整理作業総括）
	小堀嵩史（	同 調査第二課主事、整理作業委託監理）
整理作業委託受託者 株式会社九州文化財総合研究所（整理作業指導員 永井美香）		

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

大肥吉竹遺跡の所在する日田市は、大分県の西部、九州のほぼ中央部にあたり、西は福岡県、南は熊本県と県境をなす。また、北は中津市、東は玖珠郡玖珠町と接している。日田市は先述の通り、四方を山に囲まれた盆地であり、大小様々な河川が流れ込む水郷である。その立地条件から、東西南北に通じる交通の要衝として栄えた。大肥吉竹遺跡は日田市北西部の大鶴町にあり、福岡県東峰村との境に位置する。また、付近を流れる大肥川は福岡県東峰村から日田市の西部を流れ、夜明の付近で筑後川に合流する。その大肥川沿いの河岸段丘上には、多くの遺跡が確認されており、大肥吉竹遺跡もその一つである。

第2節 大肥川流域の歴史的環境

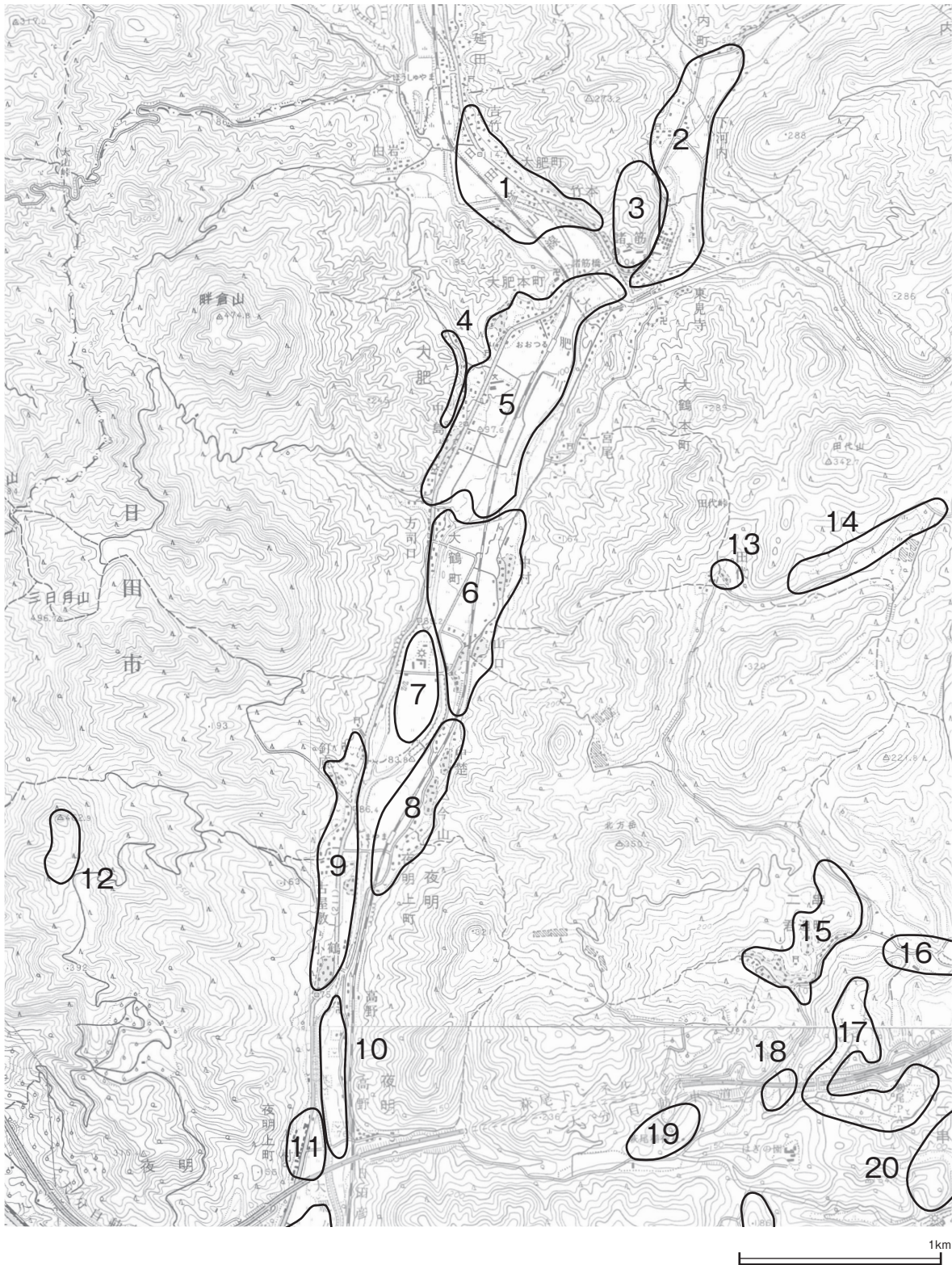
大肥川流域で確認されている生活痕跡では、縄文時代前期（大肥条里下河内地区、古屋敷遺跡）が最古である。弥生時代から近世にかけて大規模な集落が河岸段丘上に形成されており、縄文土器、龍泉窯系青磁や湖州鏡など外来の遺物が多数出土していることから、九州における交通の要衝として、人の往来が盛んな地域であったことが伺える。

今回の調査地の隣接地では、平成12・13年度に日田市教育委員会が圃場整備に伴う発掘調査を実施している。この調査では、6世紀中頃から8世紀後半の集落跡が見つかった。住居跡や水路跡からは須恵器等の一般の集落で出土する遺物以外に、朱墨墨書土器や円面硯、鍛冶跡や製塩土器が出土していることから、一般の集落とは一線を画する様相が確認されている。一方で、周辺に古墳時代の墳墓群は確認されていないが、山間部に中島横穴墓などの横穴墓が確認されており、付近の大肥中村遺跡から箱式石棺墓が検出されている。そのため、河岸段丘の周辺の高台に墳墓群が存在した可能性があるが、未調査のため実態は不明である。縄文・弥生・中世の遺物も出土しているが、遺構はほとんどなく、流れ込みによる混入遺物の可能性が高い。また、遺構面より上層にある水田層から11～12世紀頃の土器・陶磁器が出土している。弘安8年（1285年）に書かれた『豊後国図田帳』によると、大肥川流域は「大肥荘」と呼ばれ、安楽寺（福岡県太宰府市）に寄進された荘園であり、『天満宮安楽寺草創日記』に長元5年（1032年）、同寺院の喜多院建立の際に寄進されたと記述している。

【参考文献】

日田市教育委員会 2004 『大肥吉竹遺跡』 日田市埋蔵文化財調査報告書第48集

日田市教育委員会 2006 『大肥遺跡—B・C区の調査の記録—』 日田市埋蔵文化財発掘調査報告書第66集



- | | | | | |
|-----------|----------|----------|----------|-----------|
| 1 大肥吉竹遺跡 | 5 大肥遺跡 | 9 古屋敷遺跡 | 13 田代遺跡 | 17 二串西原遺跡 |
| 2 大肥下河内遺跡 | 6 大肥中村遺跡 | 10 高野遺跡 | 14 田ノ原遺跡 | 18 桐尾遺跡 |
| 3 影ノ木遺跡 | 7 嶋田遺跡 | 11 上村遺跡 | 15 君迫遺跡 | 19 萩尾遺跡 |
| 4 中嶋横穴墓群 | 8 今山遺跡 | 12 三日月遺跡 | 16 熊本遺跡 | 20 友田坂本遺跡 |

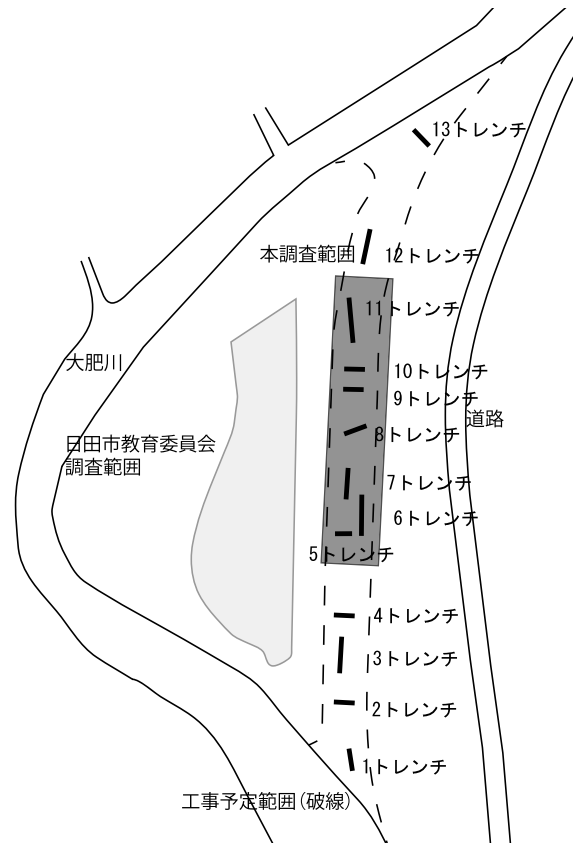
第1図 大肥吉竹遺跡と周辺の遺跡 (1/20,000)

第3章 発掘調査の成果

第1節 確認調査の概要

発掘調査の起因となった事業は、吉竹地区の河岸段丘の山側に幅30mほどの捷水路を南北方向に設置する工事である。そのため、水路の設置予定箇所には13箇所のトレンチを設置し、重機で掘り下げ遺構・遺物の確認をした。

調査地は広範囲にわたるため土層状況は一様ではないが、5～11トレンチでは淡灰白色粘質土の上面が遺構確認面となる。遺構確認面の高さは現地地表下約50～200cmである。遺構は6トレンチで溝や土坑、11トレンチで溝、柱穴等を検出した。6トレンチでは溝を塞ぐように木材が出土しており、井堰の可能性もあった。遺物は少量ながら須恵器や土師器が出土しており、日田市教育委員会の発掘調査で確認された集落の縁辺部にあたると考えられた。その他のトレンチでは、水田層下に砂礫混じりの氾濫層が確認される状況であった。以上の結果を受け遺構の確認をされた箇所を中心に、4928㎡について本調査を実施することとなった。



第2図 試掘調査地点

第2節 本調査の概要

本調査地は区域1（2520㎡）と区域2（2408㎡）に分けて調査した。調査面積は合計で4928㎡と広大である。本調査の南西隣では隣接地から日田市教育委員会の発掘調査によって古墳時代～古代の集落跡が検出されているにもかかわらず、遺構と遺物の分布が希薄であり、部分的に削平を受けた箇所や、攪乱された痕跡が広範囲で確認された。

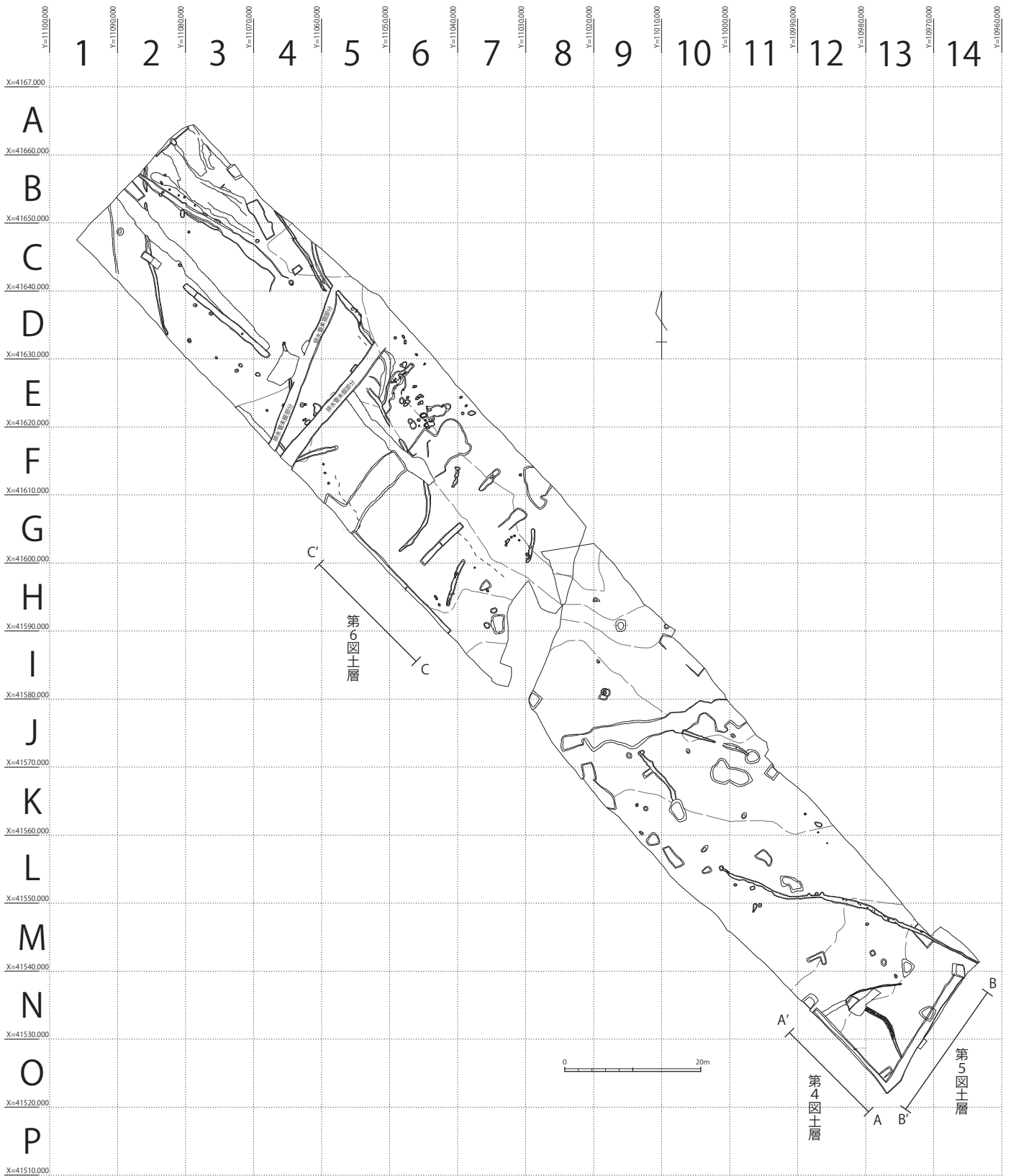
主な遺構として、古墳時代～古代の水路跡や中近世の溜井戸、時期不詳の石組溝などを検出した。

第3節 調査区の土層

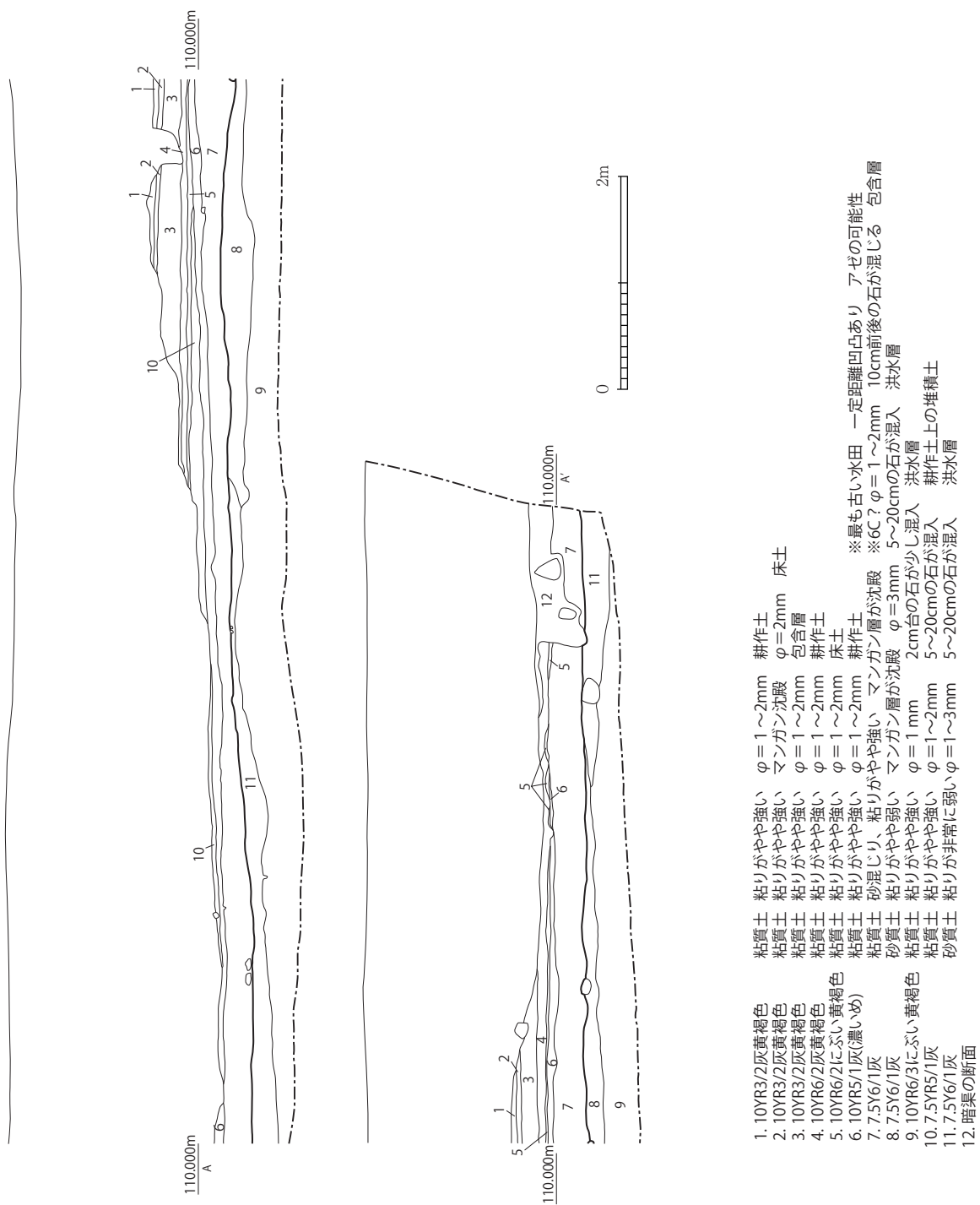
本調査区の土層断面図を第4～6図に示す。

区域1の堆積層は細かくは16層、大きく3つに分けることができる（第4・5図）。表土から80cm程度の深さまで、近代の圃場整備によって大きく削平されており、厚く盛土造成されている。盛土下から50～20cm（1～6層）は、中世～近世の耕作土が残っており、6層のように古代～中世の可能性のある古い水田層が部分的に残っている。耕作土から下は、洪水層が堆積しており、この洪水層の最上層である8・9・13層の上面で、遺構を検出した。また、西壁トレンチの26層付近から古墳時代後期前半の土師器甕が出土したが、下層の洪水層から遺構を確認することはできなかった。

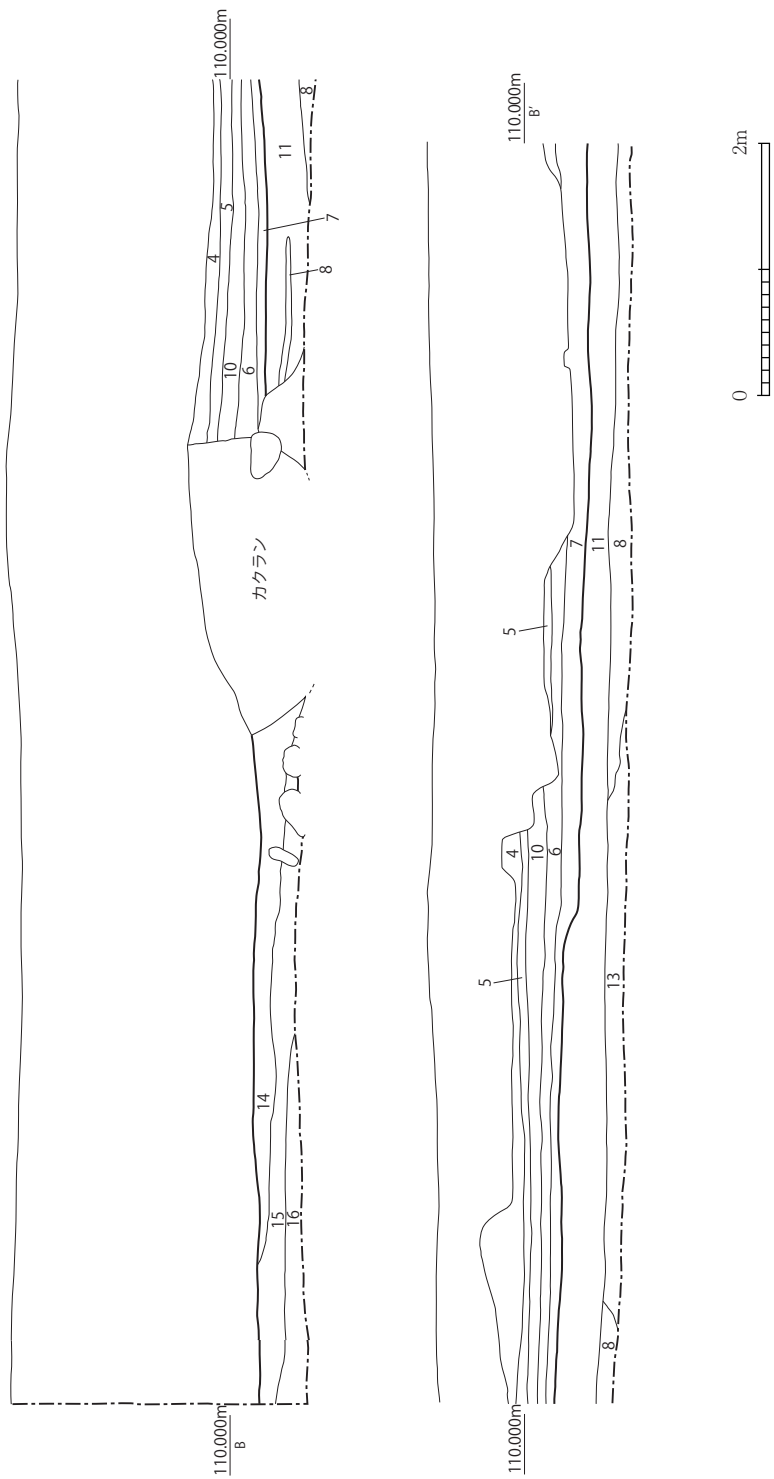
区域2の堆積層は18層あり、区域1と同様に大きく3つに分けることができる（第6図）。表土から30cmは盛土で、盛土から20cm下（1・2・4・5層）は中世以降の耕作土である。耕作土から20cm下まで埋土があり、その下は洪水層が堆積している。区域1と同様に、洪水層の最上層（24層）の上面で遺構を検出した。これら洪水層（24～30層）は、南側へ流れ込むよう堆積しており、遺構面の等高線からも南に開いた谷状の地形をしていたことを確認できたため、本調査地が旧河道であったことが想定できる。



第3図 大肥吉竹遺跡遺構配置図 (1/800)

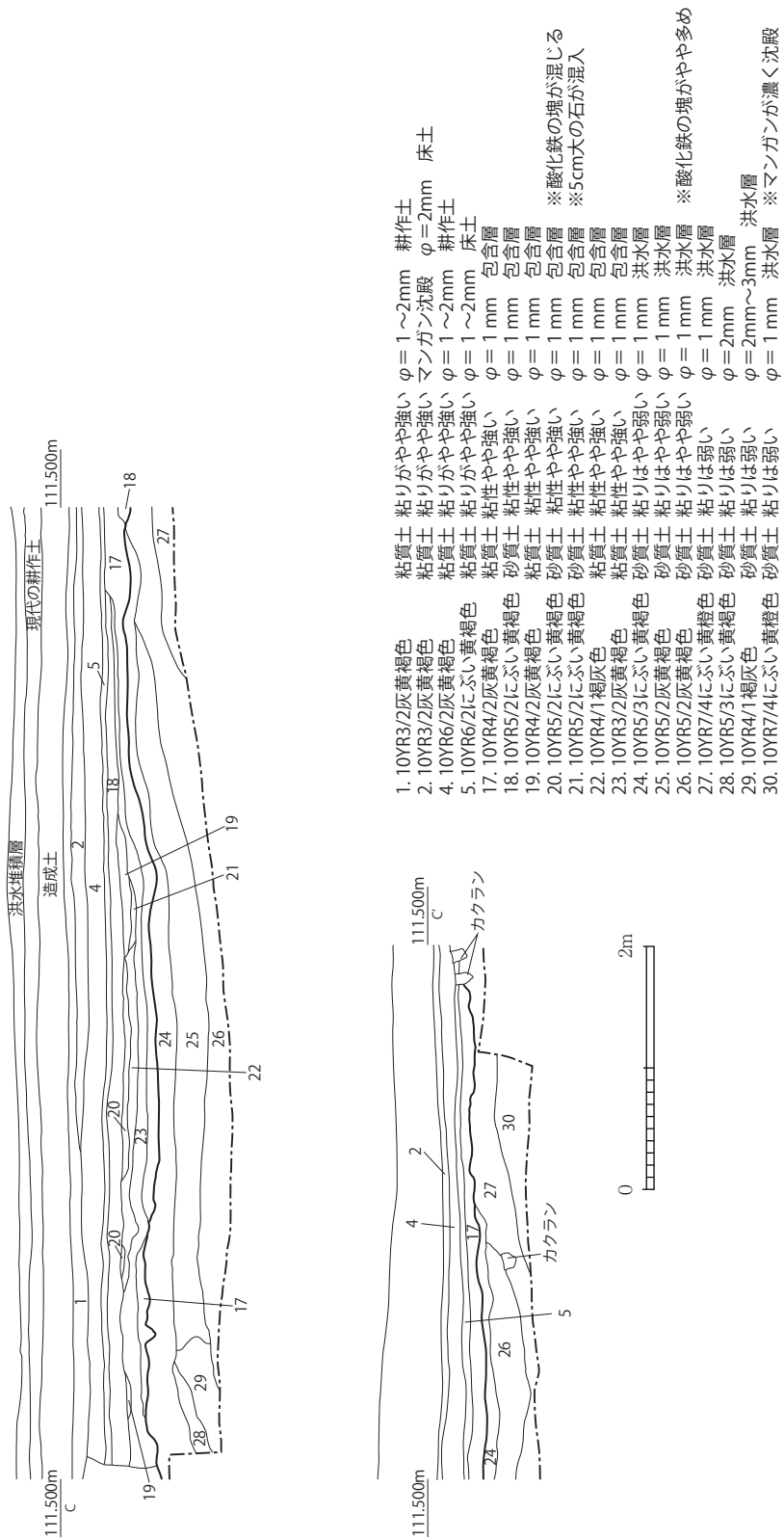


第4図 区域1 トレンチ西側土層断面図 (1/60)



- 4. 10YR6/2灰黄褐色 粘質土 粘りがやや強い φ = 1 ~ 2mm 耕作土
- 5. 10YR6/2にふい黄褐色 粘質土 粘りがやや強い φ = 1 ~ 2mm 床土
- 6. 10YR5/1灰(濃いめ) 粘質土 粘りがやや強い φ = 1 ~ 2mm 耕作土
- 7. 7.5Y6/1灰 粘質土 砂混じり、粘りがやや強い マンガンが沈殿 φ = 3mm 5 ~ 20cmの石が混入 耕作土上の堆積土
- 8. 7.5Y6/1灰 砂質土 粘りがやや弱い マンガンが沈殿 φ = 3mm 5 ~ 20cmの石が混入 耕作土上の堆積土
- 10. 7.5YR5/1灰 粘質土 粘りがやや強い φ = 1 ~ 2mm 5 ~ 20cmの石が混入 洪水層
- 11. 7.5Y6/1灰 砂質土 粘りが非常に弱い φ = 1 ~ 3mm 5 ~ 20cmの石が混入 洪水層
- 13. 2.5Y2/1黒 砂質土 粘りがやや弱い φ = 1 ~ 2mm 洪水層
- 14. 7.5YR5/1褐灰色 50cm台の石が混じる。
- 15. 7.5YR5/1褐灰色
- 16. 7.5YR5/1褐灰色

第5図 区域1 トレンチ南壁土層断面図 (1/60)



第6図 区域2 トレンチ西壁土層断面図 (1/60)

第4節 遺構と遺物

1 区域1

SD-1 (第8図)

区域1の南西部に位置し、幅0.6m、深さ0.15m程で南東から北西に延びる溝である。灰黄褐色の粘質土が堆積しており、溝の中央部から北西に6.2mほど川原石を使った石列が2列並行している。北西部は後世の攪乱によって削平されているため、全容は不明だが南方向へ標高が下がっていき、側壁と思しき石列が並んでいることから水路として利用されていたと考えられる。遺物が出土していないため、時期は不明である。

SD-3 (第9図)

区域1の中央部から北東の調査区外へ延びる、幅0.5m、深さ0.25mの箱形断面の溝で、一部後世の削平を受けている。粘性の弱い砂質土が堆積しており、酸化鉄が沈着していることから水路として利用されていた可能性がある。7～8世紀頃の須恵器坏身が出土していることから、一番古い水田層に伴う可能性がある。

SD-3の出土遺物 (第10図)

1は須恵器坏身の口縁部であり、縁が内傾しながら立ち上がる。2は須恵器坏身でほぼ完形の状態で出土した。整った高台を持ち、底部は立ち上がって、口縁部が少し反り返っている。

SK-1 (第11図)

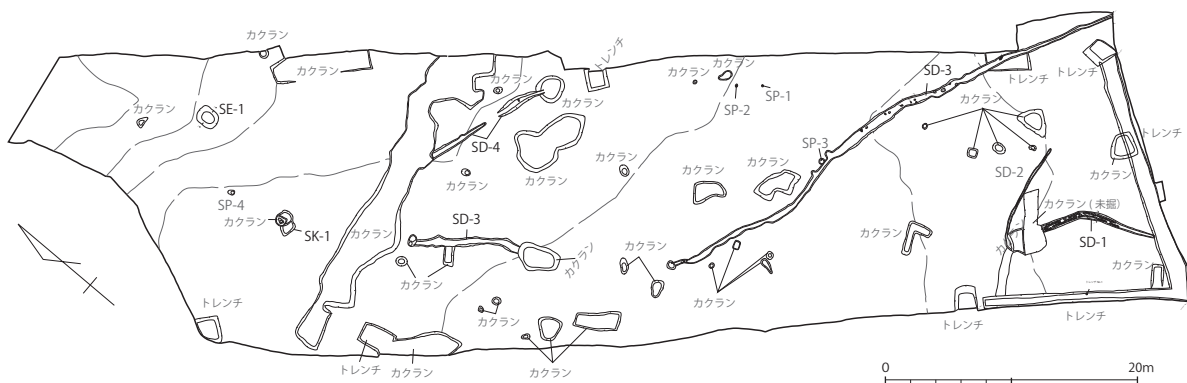
区域1で検出した土坑である。最大径1.7mの楕円形の土坑で、北西部が後世の攪乱による削平を受けている。周辺のピットと同様に、黒色の粘質土が堆積している。遺物は出土していないため時期は不明である。

SD-4 (第12図)

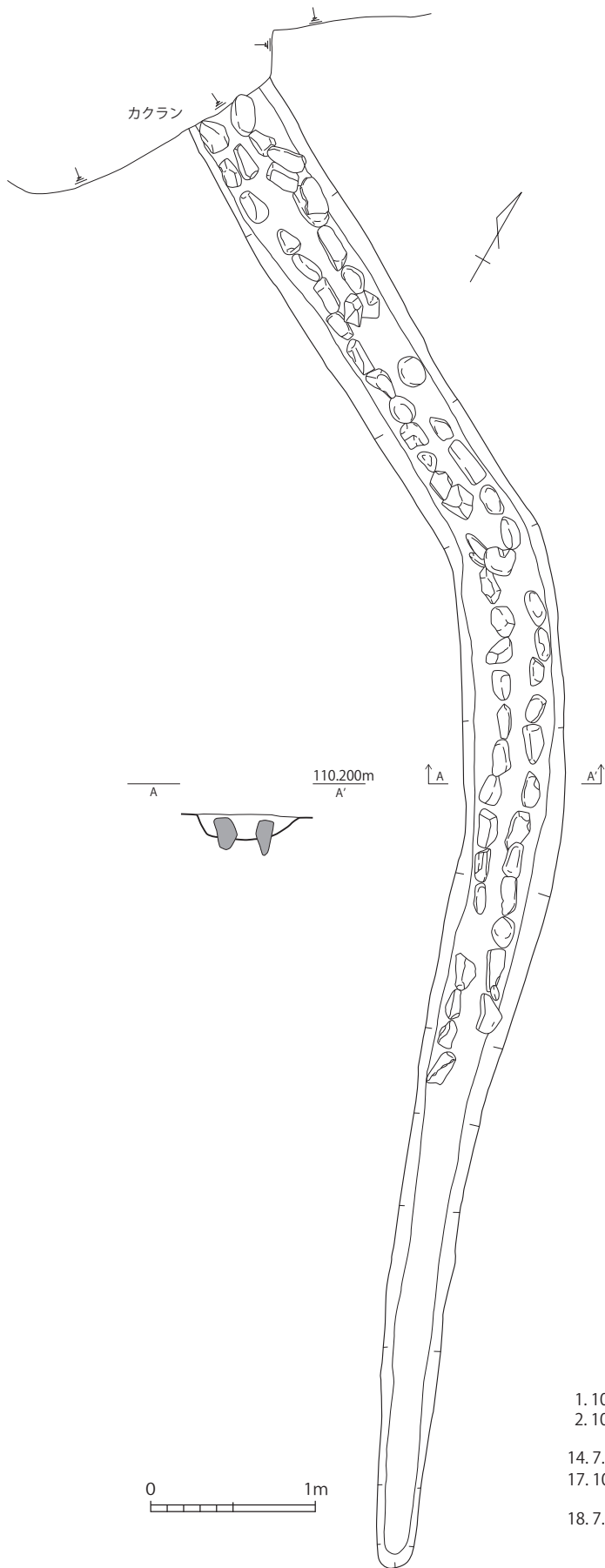
区域1内で東西に延びる、幅0.5mで深さ0.05mの溝である。灰黄褐色砂質土の埋土が堆積していた。激しく削平を受けており、全容は不明である。遺物も出土していないため、時期は不明である。

SE-1 (第13図)

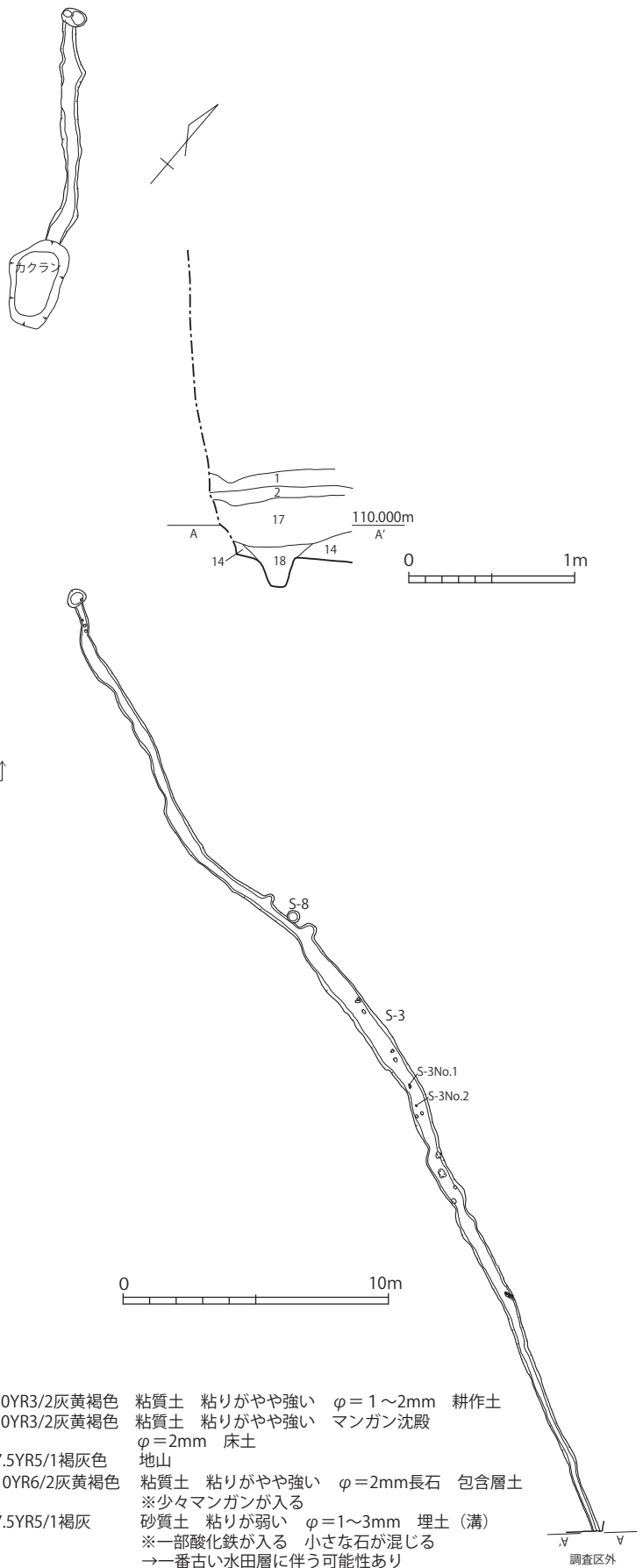
区域1の北部に位置する円筒形の遺構である。黒色の粘質土が堆積しており、水が溜まっていた痕跡があることから、農業用の溜井戸と考えられる。遺物は土師器と瓦質土器の小破片が出土していることから、中世以降の時期に使われている。



第7図 区域1 遺構配置図 (1/600)

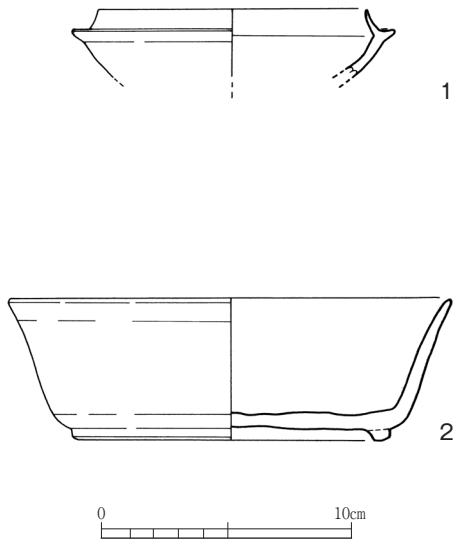


第8図 SD-1 実測図、土層断面図 (1/40)

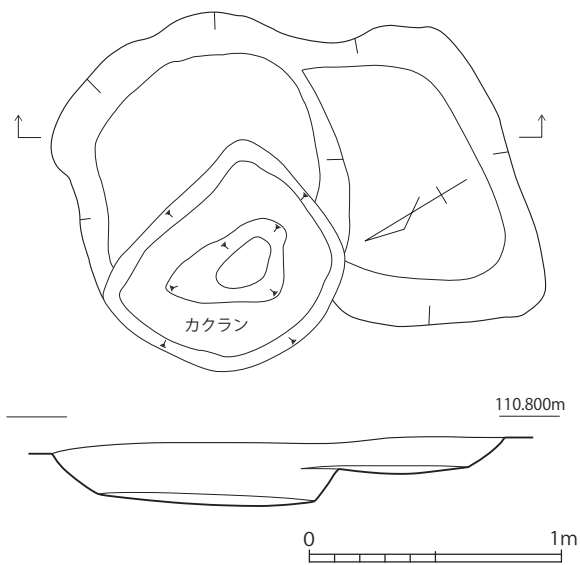
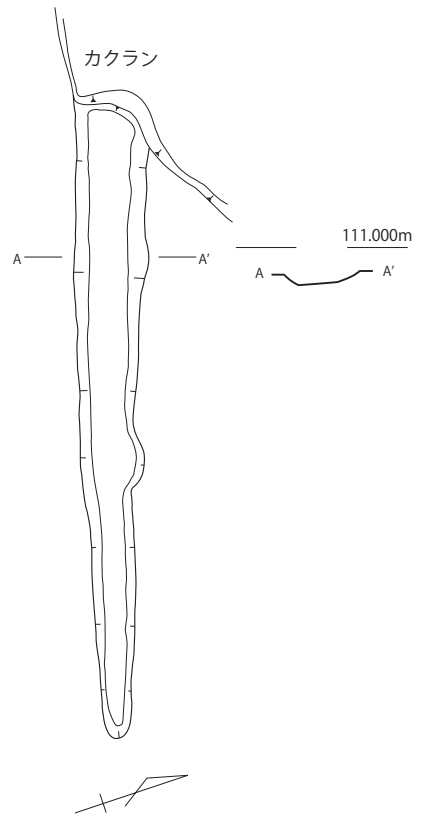


第9図 SD-3 実測図、土層断面図 (1/300、1/40)

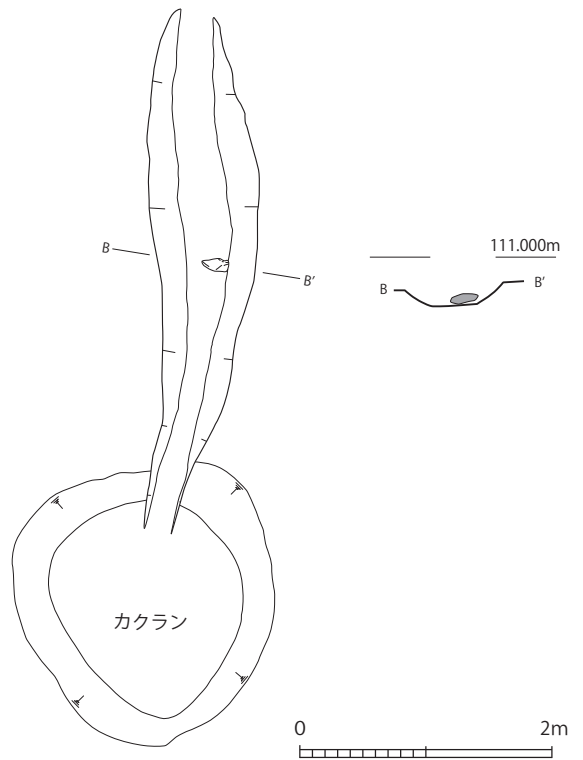
- | | | | | |
|-----------------|-----|---------|----------------------------|--------------------|
| 1. 10YR3/2灰黄褐色 | 粘質土 | 粘りがやや強い | $\phi = 1 \sim 2\text{mm}$ | 耕作土 |
| 2. 10YR3/2灰黄褐色 | 粘質土 | 粘りがやや強い | | マンガン沈殿 |
| | | | $\phi = 2\text{mm}$ | 床土 |
| 14. 7.5YR5/1褐灰色 | 地山 | | | |
| 17. 10YR6/2灰黄褐色 | 粘質土 | 粘りがやや強い | $\phi = 2\text{mm}$ 長石 | 包含層土 |
| | | | | ※少々マンガンが入る |
| 18. 7.5YR5/1褐灰 | 砂質土 | 粘りが弱い | $\phi = 1 \sim 3\text{mm}$ | 埋土 (溝) |
| | | | | ※一部酸化鉄が入る 小さな石が混じる |
| | | | | →一番古い水田層に伴う可能性あり |



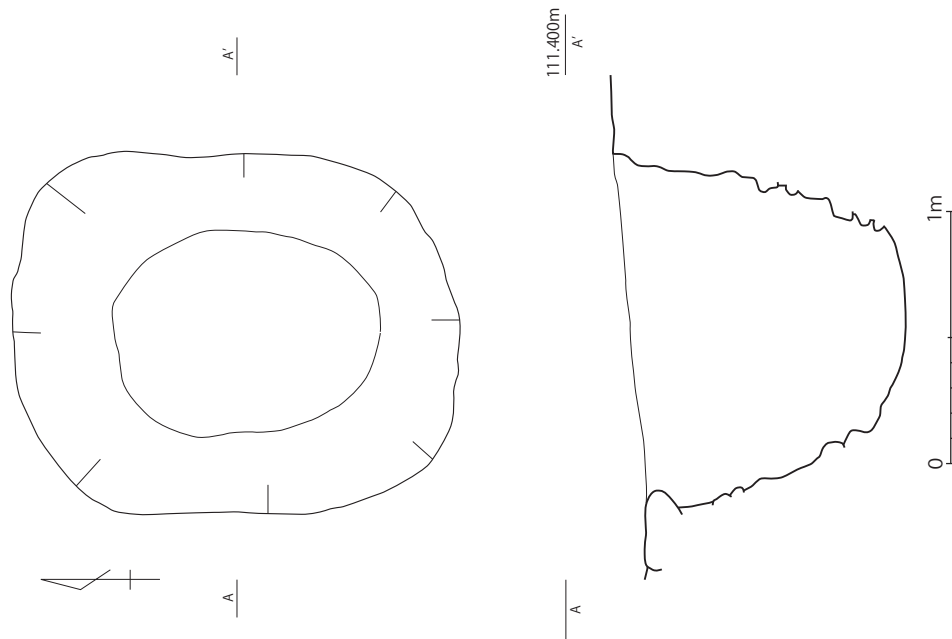
第10図 SD-3 出土遺物 (1/3)



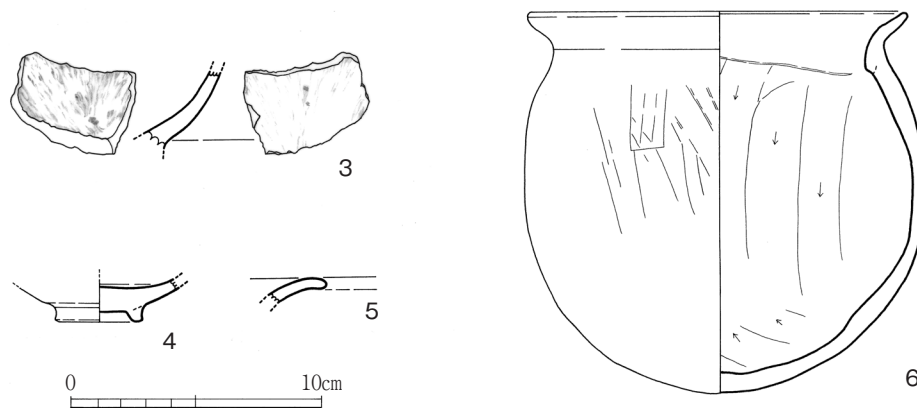
第11図 SK-1 実測図 (1/30)



第12図 SD-4 実測図 (1/60)



第 13 図 SE-1 実測図 (1/30)



第 14 図 その他出土遺物 (1/3)

その他出土遺物 (第 14 図)

3～5は遺構検出時に出土した。3は陶器碗の破片で、飴色の釉の上になめこ色の釉薬がかけられており、小石原系の陶器と考えられる。4は青磁碗の底部であり、5は青磁の端反皿である。4・5ともにオリーブ色の釉がかかっている。6は区域1西壁トレンチの9層(洪水層)付近から出土した土師器甕である。底部から体部にかけて丸みを帯びており、口縁部が外側に反り返っている。表面と内面に刷毛による調整がされている。8世紀頃のものと考えられる。

2 区域2

SD-6 (第16図)

北西から南西に延びる幅1m、深さ0.08mほど溝である。埋土は黒色の粘質土であり、酸化鉄が沈着している。北西から25mほどの位置で後世の削平によって消滅している。この溝からは、白磁や黒色土器の小破片が出土しているため、古代～中世の水路の可能性はある。

SD-6 出土遺物 (第17図)

7と8は玉縁の白磁碗の口縁部で13世紀頃のものと考えられる。9は黒色土器A類碗の破片で体部にミガキを施す。10は黒色土器碗の底部である。

SD-7 (第18図)

北の調査区外から東に延びる溝である。幅は0.35m程で深さは0.2m程であり、断面形が箱形である。褐灰色の砂質土が堆積しており、溝の底部には酸化鉄が濃く沈着している。7世紀後半の須恵器が出土しており、新しい時期の遺物も出土していないため、7世紀頃の水田の取水用水路と考えられる。

SD-7 出土遺物 (第19図)

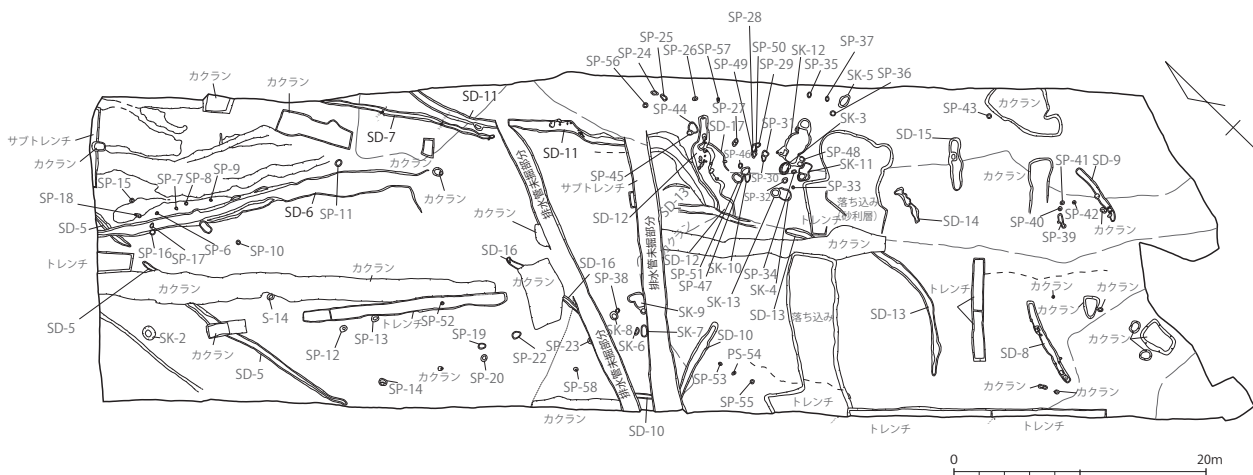
11・12ともに須恵器坏である。11は表面が摩滅した底部片、12は底部に回転ヘラ切りの痕跡が残り、底部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。

SD-11 (第20図)

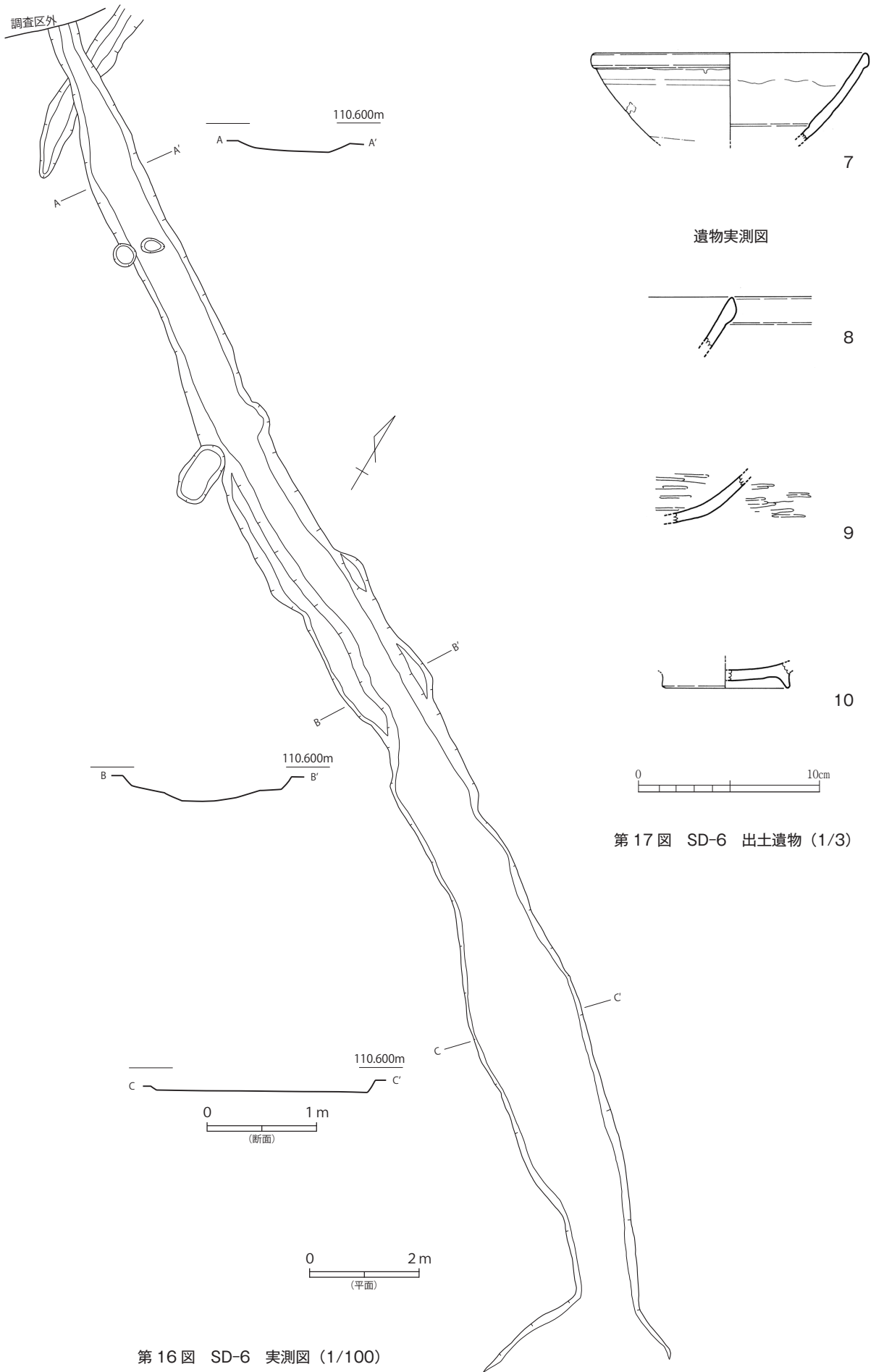
SD-7とほぼ平行する溝である。幅約0.7m、深さ0.15～0.07mで、断面形状は箱形を呈する。埋土は黒色粘質土で、酸化鉄が沈着していた。この溝は、南へ向かうにつれて形が崩れていき、徐々に浅くなっていく。また、SD-13と自然流路であるSD-12に遮られるように削られているため、どこまで溝が続いていたかは不明である。溝の中央部までSD-7と同じ形状をしており、近い時期の須恵器が出土している為、SD-7と同じように水路として使用された可能性がある。

SD-11 出土遺物 (第21図)

13は須恵器の皿である。底部は回転ヘラ切りで口縁部が反り返る。

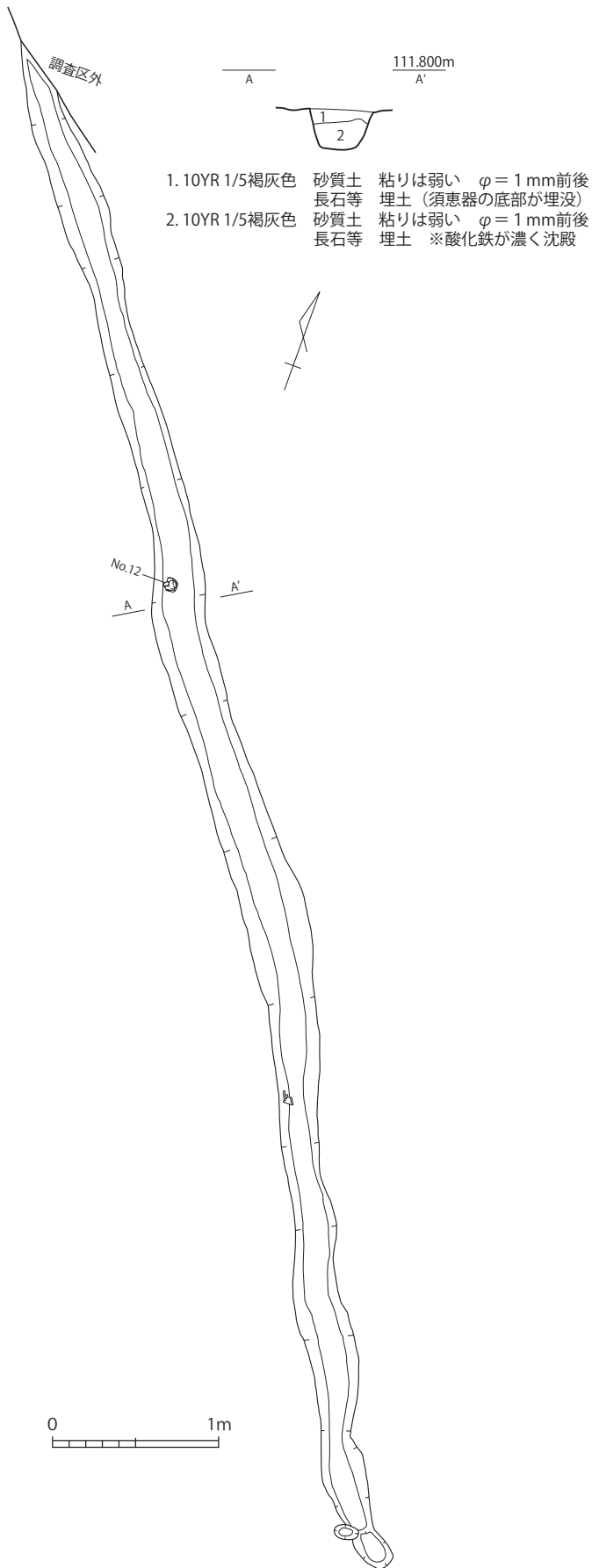


第15図 区域2 遺構配置図 (1/600)

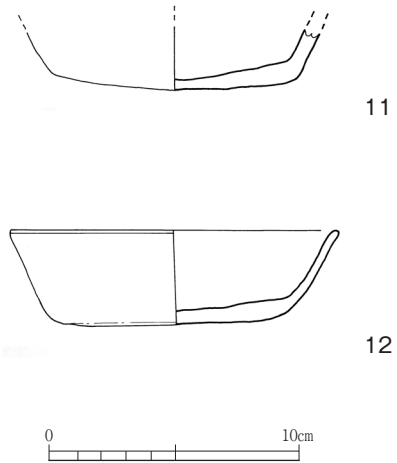


第 17 図 SD-6 出土遺物 (1/3)

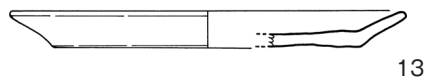
第 16 図 SD-6 実測図 (1/100)



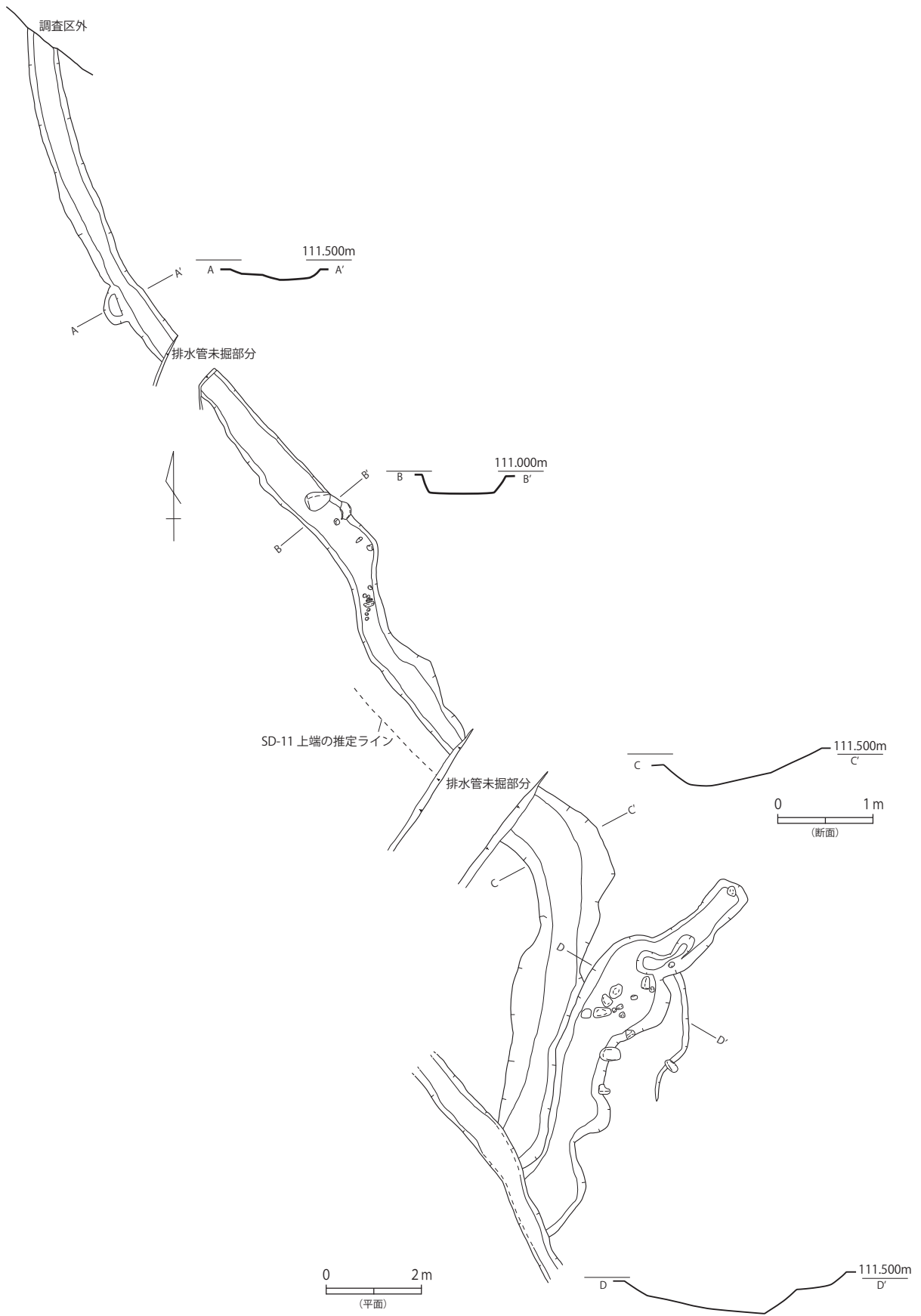
第18図 SD-7 実測図 (1/40)



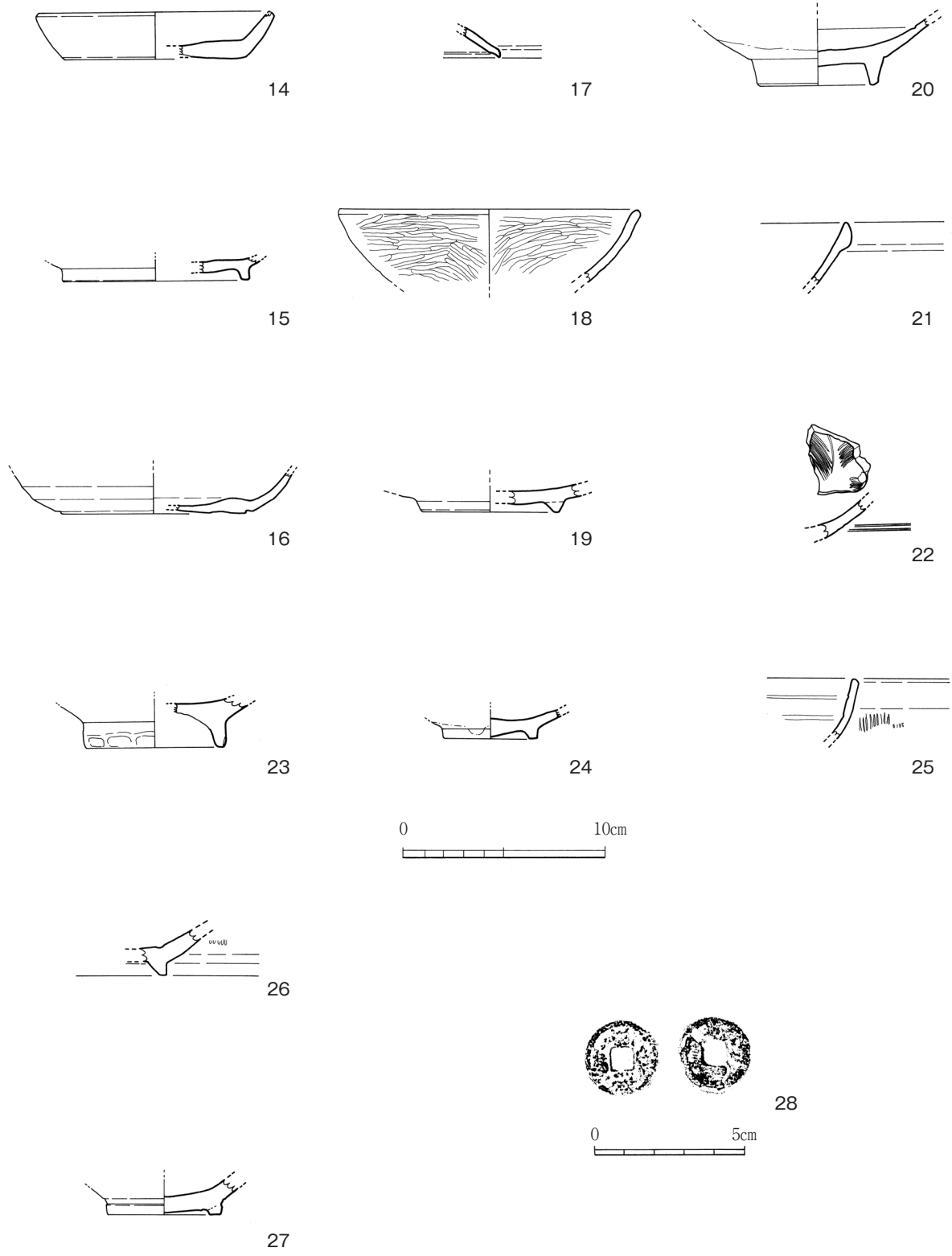
第19図 SD-7 出土遺物 (1/3)



第21図 SD-11 出土遺物 (1/3)



第 20 図 SD-11 SD-12 SD-17 実測図 (1/120)



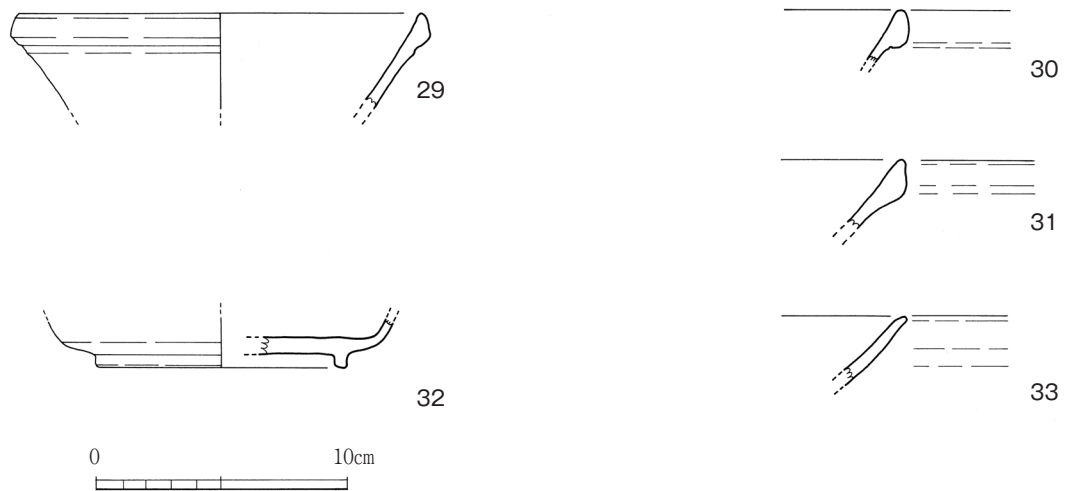
第22図 検出時に出土した遺物（14～27は1/3、28は1/2）

検出時の遺物（第 22 図）

区域 2 の遺構検出時に出土した遺物は、第 21 図に図示している。14～17 は須恵器で、14 は坏身、15 は高台付きの底部、16 は坏身の底部、17 は坏蓋の口縁部である。18・19 は黒色土器碗である。18 は口縁部の破片で内面と外面にミガキによる調整を施す。19 は高台のついた底部である。20・21 は白磁で、20 は底部 21 は玉縁碗の口縁部の破片であり、13 世紀頃のものと考えられる。22～26 は青磁で、22 は内面に文様の入った体部、23・24・26 は底部、25 は口縁の破片である。28 は銅銭だが表面が磨耗しているため、詳細は不明である。

その他遺物（第 23 図）

壁面の清掃や、表土掘削の際に出土した遺物を第 22 図に図示した。29・30 は白磁玉縁碗の口縁部片、31 は東播系須恵器捏鉢の口縁部片である。32 は高台付き須恵器坏の底部、33 は須恵器坏の口縁部であり、口縁が外反する。



第 23 図 その他遺物（1/3）

遺構一覧表

遺構番号	遺構種別	位置	埋土			出土遺物	遺構番号	遺構種別	位置	埋土			出土遺物
			土色	土色記号	土質					土色	土色記号	土質	
SD-1	水路	N13	個別図参照				SP-36	ピット	F7	黒褐色	7.5YR3/2	粘質土	
SD-2	溝	N13	灰褐色	7.5YR	砂質土	染付	SP-37	ピット	F7	黒褐色	7.5YR3/3	粘質土	
SD-3	溝	K9M13	個別図参照				SK-5	土坑	F7	灰黄褐色	10YR5/4	粘質土	
SD-4	溝	J10	個別図参照				SD-9	溝	G8	灰黄褐色	10YR5/4	粘質土	
SK-1	土坑	I9	個別図参照				SK-6	土坑	E4	灰黄褐色	10YR5/2	砂質土	
SP-1	ピット	L12	灰褐色	7.5YR	砂質土		SK-7	土坑	E4	灰黄褐色	10YR5/2	砂質土	
SP-2	ピット	K12	灰褐色	7.5YR	砂質土		SK-8	土坑	E4	灰黄褐色	10YR5/4	粘質土	
SP-3	ピット	L12	灰褐色	7.5YR	砂質土		SP-38	ピット	E4	灰黄褐色	10YR5/4	粘質土	
SE-1	溜井	H9	個別図参照				SK-9	土坑	E4	灰黄褐色	10YR5/4	粘質土	
SP-4	ピット	I9	灰褐色	7.5YR	砂質土		SD-10	溝	F4F5	灰黄褐色	10YR5/4	粘質土	
SK-2	土坑	C2	灰黄褐色	10YR5/2	砂質土		SD-11	溝	D5C5	個別図参照			
SD-5	溝	B2C2	灰褐色	7.5YR	砂質土		SP-39	ピット	G7	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土	
SD-6	溝	C3	個別図参照				SP-40	ピット	G7	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土	
SP-5	ピット	C2	灰黄褐色	10YR5/2	砂質土		SP-41	ピット	G7	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土	
SP-6	ピット	B2	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土		SP-42	ピット	G7	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土	
SP-7	ピット	B2	黒褐色	7.5YR3/2	粘質土		SP-43	ピット	F7	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土	
SP-8	ピット	B2	黒褐色	7.5YR3/3	粘質土		SD-12	溝	E6E5	個別図参照			
SP-9	ピット	B3	黒褐色	7.5YR3/4	粘質土		SP-44	ピット	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土	
SP-10	ピット	C3	黒褐色	7.5YR3/6	粘質土		SP-45	ピット	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土	
SP-11	ピット	C4	黒褐色	10YR5/2	粘質土		SD-13	溝	E5F6G6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土	
SP-12	ピット	C5D3	灰黄褐色	10YR5/2	砂質土		SP-46	ピット	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土	
SP-13	ピット	D3	灰黄褐色	10YR5/2	砂質土		SP-47	ピット	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土	
SP-14	ピット	D3	灰黄褐色	7.5YR3/1	砂質土		SK-10	土坑	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土	
SP-15	ピット	B2	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土		SK-11	土坑	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土	
SP-16	ピット	B2	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土		SP-48	ピット	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土	
SP-17	ピット	B2	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土		SK-12	土坑	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土	須恵器
SD-7	水路	C4	個別図参照				SP-49	ピット	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土	
SP-18	ピット	B2	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土		SP-50	ピット	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土	
SP-19	ピット	E3	灰黄褐色	10YR5/4	砂質土		SK-13	土坑	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土	
SP-20	ピット	E3	灰黄褐色	10YR5/4	砂質土		SP-51	ピット	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土	
SP-22	ピット	E4	灰黄褐色	10YR5/4	砂質土		SP-52	ピット	D3	黒褐色	7.5YR3/2	粘質土	
SP-23	ピット	E4	灰黄褐色	10YR5/4	砂質土		SP-53	ピット	F5	灰黄褐色	10YR5/4	砂質土	
SP-24	ピット	D6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土		SP-54	ピット	F5	灰黄褐色	10YR5/4	砂質土	
SP-25	ピット	D6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土		SP-55	ピット	F5	灰黄褐色	10YR5/5	砂質土	
SP-26	ピット	D6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土		SD-14	溝	F6	灰黄褐色	10YR5/2	砂質土	
SP-27	ピット	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土		SD-15	溝	F7	灰黄褐色	10YR5/2	砂質土	
SD-8	溝	H6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土		SD-16	溝	D4E4	灰黄褐色	10YR5/2	砂質土	
SP-28	ピット	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土		SD-17	溝	E6	個別図参照			
SP-29	ピット	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土		SP-56	ピット	D6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土	
SP-30	ピット	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土		SP-57	ピット	E6	黒褐色	7.5YR3/2	粘質土	
SP-31	ピット	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土		SP-58	ピット	E4	灰黄褐色	10YR5/5	砂質土	
SP-32	ピット	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土								
SP-33	ピット	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土								
SP-34	ピット	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土								
SK-3	土坑	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土								
SK-4	土坑	E6	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土								
SP-35	ピット	F7	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土								

遺物観察表

挿図番号	器種	遺構	法量 (cm)		器面調整		色調 (外面/内面)	備考
			直径	器高	外面	内面		
第10図	1 須恵器 坏	SD-3	(10.7)	2.7 + a	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 / 灰色	
第10図	2 須恵器 高台付碗	SD-3	(17.4)	5.6	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	
第14図	3 陶器碗	遺構検出		3.1 + a	施釉 (ナメコ釉)	施釉 (ナメコ釉)	灰白色	小石川焼
第14図	4 青磁碗	遺構検出		1.7 + a	施釉・露胎	施釉	オリーブ灰色	
第14図	5 青磁皿	遺構検出		1.8 + a	施釉	施釉	オリーブ灰色	端反皿
第14図	6 土師器 甕	トレンチ	14.9	15.2	ヨコナデ・強いヨコナデ・ 工具ナデ	ヨコナデ・工具ナデ	にぶい橙色 / にぶい橙色～淡橙色	内外面：スス付着
第17図	7 黒色土器 碗	SD-6		1.4 + a	ヨコナデ・ナデ	ナデ	灰褐色 / 黒色	
第17図	8 黒色土器 碗	SD-6		2.4 + a	ヘラミガキ	ナデ・ヘラミガキ	黄褐色 / 暗灰褐色	
第17図	9 白磁碗	SD-6		2.8 + a	施釉	施釉	透明釉	玉縁口縁
第17図	10 白磁碗	SD-6	(14.9)	4.8 + a	施釉	施釉・沈線	透明釉	玉縁口縁
第19図	11 須恵器 坏身	SD-7		2.5 + a		摩滅	灰白色	
第19図	12 須恵器 坏身	SD-7	12.9	3.7	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 / 青灰色	
第21図	13 須恵器 皿	SD-11	(15.6)	1.4	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	青灰色	
第22図	14 須恵器 坏身	C-4 遺構検出	(11.4)	2.3	摩滅	摩滅	白灰色	
第22図	15 須恵器 坏	E-5 遺構検出		1.1	回転ナデ	回転ナデ	灰色	
第22図	16 須恵器 坏	H-6 遺構検出		2.0 + a	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	灰色	内外面：鉄分付着
第22図	17 須恵器 坏	E-5 遺構検出		1.5 + a	回転ナデ	回転ナデ	灰色	
第22図	18 黒色土器 碗	E-6 遺構検出		1.3 + a	ナデ・ヨコナデ	ナデ	黒褐色	
第22図	19 黒色土器 碗	F-4 遺構検出	(14.8)	3.6 + a	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	黒灰色	
第22図	20 白磁碗	D-5 遺構検出		3.2 + a	施釉・露胎	施釉	白色釉・ 灰白色 / 白色釉	
第22図	21 白磁碗	E-5 遺構検出		3.0 + a	施釉	施釉	灰白色	玉縁口縁
第22図	22 青磁碗	D-6 遺構検出		1.8 + a	施釉・沈線	施釉・文様	オリーブ灰色	同安窯
第22図	23 青磁碗	E-5 遺構検出		2.45 + a	施釉	施釉	オリーブ灰色	高台：文様あり
第22図	24 青磁碗	E-5 遺構検出		1.45 + a	施釉	施釉	オリーブ灰色	見込み： 蛇の目釉ハギ
第22図	25 青磁碗	H-8 遺構検出		2.9 + a	施釉	施釉	オリーブ灰色	外面：文様か
第22図	26 青磁碗	G-8 遺構検出		2.3 + a	露胎	施釉	灰白色 / 灰オリーブ色	内面：貫入あり
第22図	27 青磁碗	E-5 遺構検出		2.45 + a	施釉	施釉	オリーブ灰色	高台：文様あり
第23図	29 白磁碗	攪乱		2.0 + a	施釉	施釉	淡褐色	玉縁口縁
第23図	30 白磁碗	表土	(8.0)	3.7 + a	施釉	施釉	透明釉	
第23図	31 須恵器 鉢	表土		2.7 + a	回転ナデ	回転ナデ	青灰色～ 灰白色 / 青灰白色	東播系
第23図	32 須恵器 高台付 坏	壁面精査		2.0 + a	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	
第23図	33 須恵器 坏	SK-12		2.7 + a	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 / 暗灰色	

挿図番号	器種	出土地点		直径 (cm)	重量 (g)	素材	備考
第22図	銅銭	区域 2	G-8 遺構検出	2.4	2.4	銅	

第4章 総括

1. 本調査地の年代と位置づけ

前章で紹介した通り、本調査では古墳時代～中近世の水路や溜井戸などの遺構を検出した。遺構の時期は日田市教委調査区における4期～5期（7世紀末～8世紀中頃）に該当する。また、土層と出土遺物から西側の集落と同じ時期（中世）に耕作地として造成をうけていることがわかる。日田市教委調査区の遺構配置図と、本調査区の遺構配置図を合成すると、第23図のようになる。本調査地で検出した遺構に、日田市教委の調査区で検出された遺構とつながるものは確認できなかった。日田市教委調査区に建物跡などの集落の中心となる遺構が集中している反面、本調査地の遺構密度は低く、遺構の種類も水利関係に偏っている。つまり、本調査区は日田市教委調査区の集落の縁辺部にあたり、耕作地であったと考えられる。

2. 大肥吉竹遺跡周辺の土地利用について

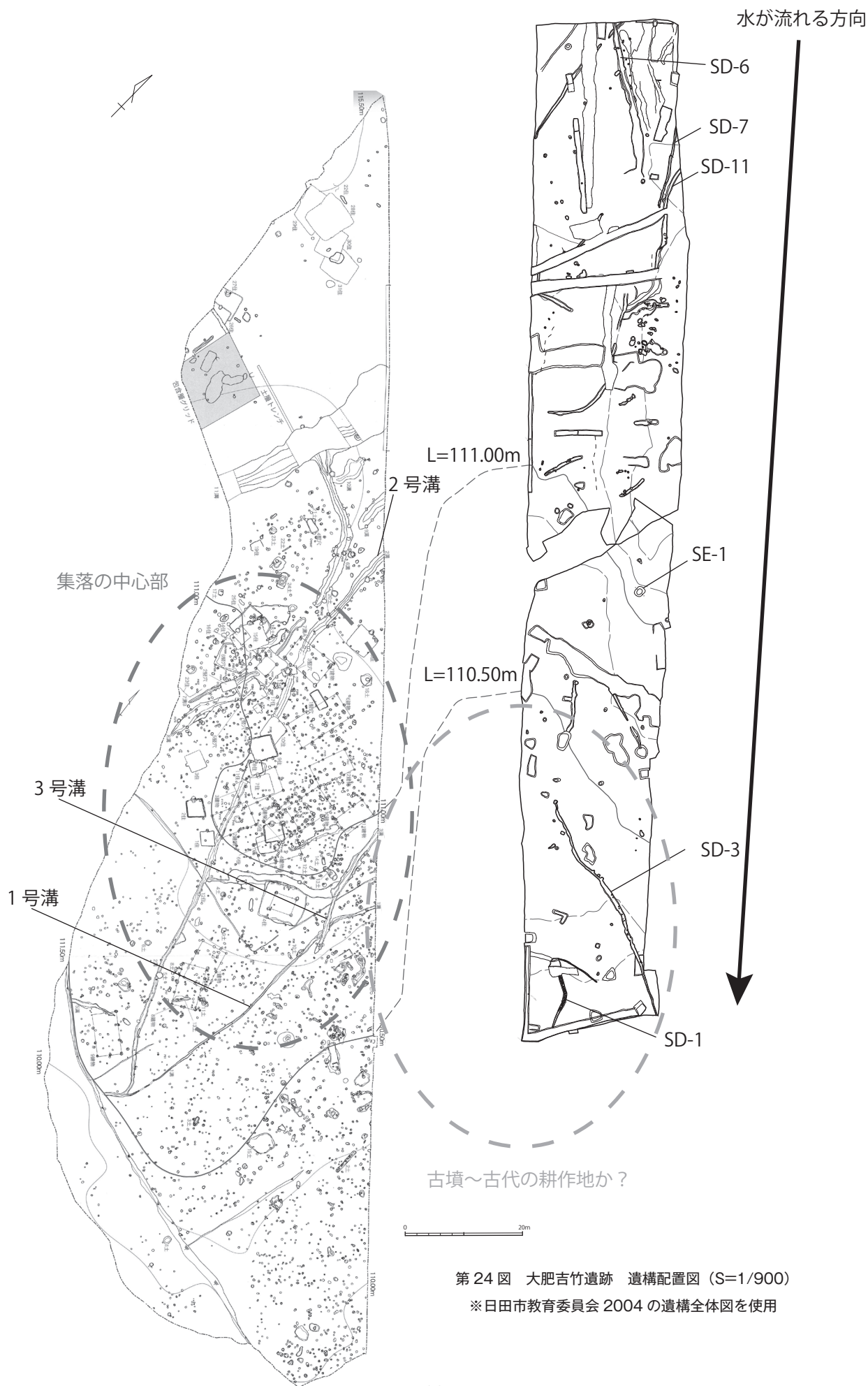
本調査では、古墳時代～近代の耕作地が見つまっているため、今回の発掘調査成果と合わせて、周辺地形や地籍図などを基に、吉竹地区における土地利用の在り方について考える。

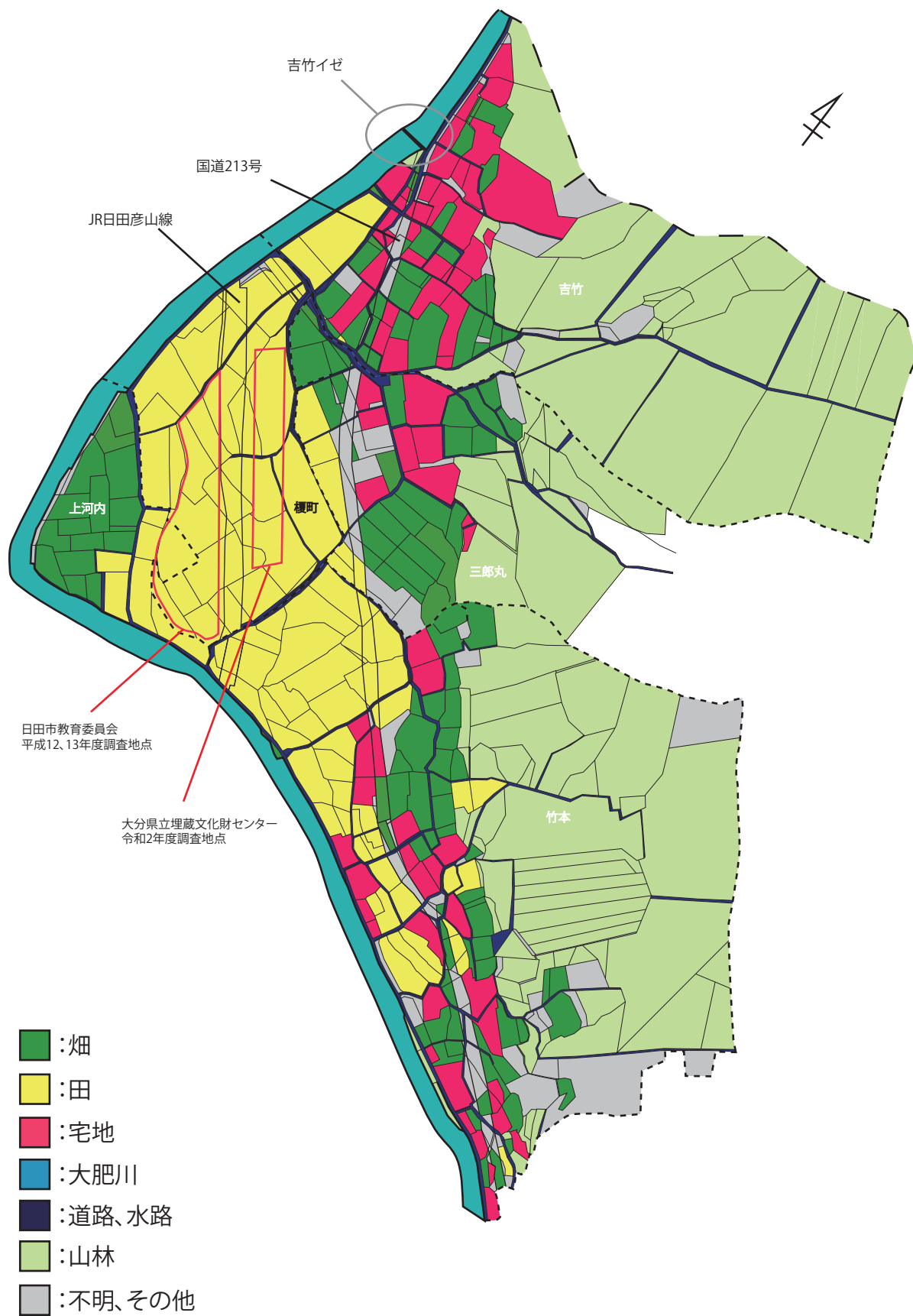
明治21年調製の地籍図を確認すると、山裾の段丘面に住居と畑が広がっており、水田は本調査地周辺に集中している（第24図）。一方で、字上河内では水田ではなく畑として利用されている。水は、大肥川の上流に井堰（吉竹イゼ）を築いて、水田用の水を確保し、生活用水や畑作に必要な水は山から流れてくる水から確保していた。

次に、旧地形を復元するため、遺構面の標高を計測すると、古墳時代～古代集落部分の標高が周囲より若干高くなっており、自然堤防のような微高地であったことがわかる。その一方で、本調査地は標高が若干低く、南向きの谷状の地形になっている。また、水路と考えられるSD-1、SD-6、SD-7は、北西から南東に向かって伸びており、SD-11、SD-12、SD-17のような自然流路も南の谷底に向かって伸びている。つまり、川の上流から取水した水を旧地形に沿って流しており、河川が氾濫した際には、本調査地にも川の水が流れこんでいたことが想定できる。

そのため、古墳時代～古代にかけては、河川の氾濫の被害を緩和でき、高低差から灌漑用の水路を通すことが困難な微高地上に集落が形成され、灌漑が比較的容易な低地部に耕作地として利用していた。そして、中世に入り大肥荘の開発に伴って、耕作地を整備することで自然地形を克服し、元々集落があった自然堤防の平坦地や緩斜面の大半が水田として利用できるようになった。居住域は山裾に移した上で、川からの水を通せない場所に畑を作ったと考えられる。

以上のことから、古墳時代～古代の段階では自然地形を活かした土地利用がなされるが、中世に入って、大きな土木工事による開発が入ることで、平地の殆どを水田として利用するようになった様子が確認できる。





第 25 図 大肥吉竹遺跡周辺の土地利用図（明治 21 年調製の旧字図から引用）

写真図版①



大肥吉竹遺跡空中写真（北から）

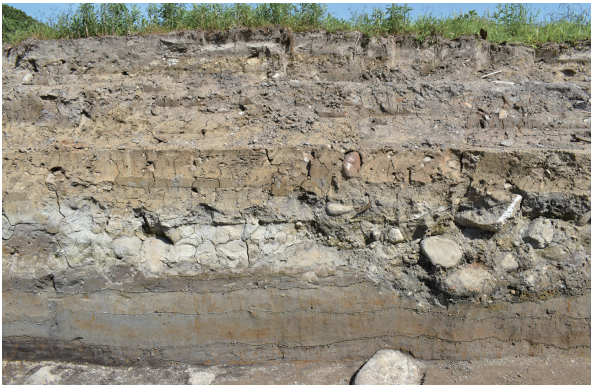


大肥吉竹遺跡空中写真（南から）

写真図版②



大肥吉竹遺跡空中写真（上が西）



区域1 トレンチ南壁土層断面



区域1 トレンチ遺物出土状況



SD-1 完掘状況



SD-3 完掘状況

写真図版③



SD-3 遺物出土状況



SD-3 北側掘削状況



SD-4 完掘状況



SK-1 完掘状況



SE-1 完掘状況



SD-6 完掘状況



SD-7 完掘状況



SD-7 遺物出土状況

写真図版④



SD-11, SD-12 完掘状況



区域2 トレンチ西側土層断面



第10図1



第10図2



第14図3



第14図4



第14図5



第14図6



第17図7



第17図8



第17図9

写真图版⑤



第 17 图 10



第 19 图 11



第 19 图 12



第 21 图 13



第 22 图 14



第 22 图 15



第 22 图 16



第 22 图 17



第 22 图 18



第 22 图 19



第 22 图 20



第 22 图 21

写真图版⑥



第 22 图 22



第 22 图 23



第 22 图 24



第 22 图 25



第 22 图 26



第 22 图 27



第 22 图 28



第 23 图 29



第 23 图 30



第 23 图 31



第 23 图 32



第 23 图 33

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおひよしたけいせき							
書名	大肥吉竹遺跡							
副書名	大肥川河川災害復旧等関連緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第22集							
編著者名	植田絃正							
編集機関	大分県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒870-0152 大分市牧緑町1番61号 TEL 097-552-0077							
発行年月日	西暦 2022年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〃	〃			
おおひよしたけいせき 大肥吉竹遺跡	ひたし 日田市大字大肥	442011	204343	33°22'27"	130°52'51"	2020.04.14 ～ 2020.07.02	4,928m ²	大肥川河川災害復旧等関連緊急事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
大肥吉竹遺跡	集落跡	古代～近世	溝、水路、溜井戸、土坑	青磁、白磁、須恵器、陶器、磁器				
要約	大肥吉竹遺跡の発掘調査は大肥川河川災害復旧等関連緊急事業に伴い実施した。確認された主な遺構は、古墳時代～古代の水路、中近世の溜井戸である。遺物は、古墳時代～古代の須恵器・土師器、中世の青磁・白磁、近世の陶磁器類等が出土している。本調査地は、日田市教育委員会が2004年に実施した発掘調査によって検出された、古墳時代～古代の集落の縁辺部であった。中世以降に大規模な開発があったことで、集落の位置が調査地東側の山裾に移動し、調査地は現代に至るまで、耕作地として利用されていた。							

大肥吉竹遺跡

－大肥川河川災害復旧等関連緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－
大分県立埋蔵文化財センター調査報告書 第22集

令和4(2022)年3月31日

編集・発行 大分県立埋蔵文化財センター
〒870-0152
大分市牧緑町1番61号
TEL 097-552-0077

印刷 元屋印刷株式会社
〒876-0811
大分県佐伯市鶴谷町3丁目1番9号
TEL 0972-24-0900